様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　７日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2011
課題番号：２２７２００７６

研究課題名（和文）　仏教類書とその受容史―説話文学研究のための基礎研究として―

研究課題名（英文）　Study on Chinese Anthologies of Buddhist texts and their Acceptance in East Asia

研究代表者
本井　牧子（MOTOI MAKIKO）
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：00410978

研究成果の概要（和文）：
本研究では、日本仏教説話文学における漢訳仏典の影響を考察するための基礎研究として、中国撰述の仏教類書の調査研究を行った。主な対象としたのは『金蔵論』と『法苑珠林』とである。『金蔵論』については、新出の韓国版本をも含めた現存本文を公刊し、あわせて奈良朝の一切経から『今昔物語集』にいたる受容の様相を概観した。『法苑珠林』に関しては、敦煌写本の現物調査を行い、書誌データ等を一覧する基礎資料を作成した。

研究成果の概要（英文）：
This research project has focused on Chinese Anthologies of Buddhist texts, which had the inpact on the Japanese narrative literature (*setsuwa bungaku* 説話文学). The main subjects of the research was the following two Buddhist Anthologies; the *Jin zang lun* （金蔵論） and the *Fa yuen zhu lin* （法苑珠林）.
As a result of the research, a critical edition of all extant text of the Jin zang lun , including the newly discovered text in Korea, was published. The investigation also leads to the conclusion that the Jin zang lun was transmitted to Japan and was part of the Buddhist Canon（一切経） in Nara period, and was widely read through Heian period, until the editor of the *Konjaku monogatari-shu*（今昔物語集） used it as the main source of inspiration.
Another result of the project was the collection of bibliographic data of the *Fa yuen zhu lin* in Dunhuang Manuscripts, collected through the investigation of the collection of Dunhuang Manuscript.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：類書・説話文学・仏典・唱導・敦煌・金蔵論・今昔物語集

１．研究開始当初の背景

仏典におさめられた本生譚や譬喩因縁譚は、日本の仏教説話文学の源泉として、日本文学に大きな影響を及ぼした。これらの本生譚や因縁譚が参照される場合、原拠の仏典からの直接引用だけでなく、それらを分類して集成した仏教類書を介することが多いことは周知の事実となっている。説話文学を研究する上で、これらの仏教類書との関連を検討することは必須の作業であるが、この仏教類書については、新出資料の出現をみるなど、近年新たな研究段階に入っている。

研究代表者である本井は「中国北朝後半期の仏教の類書『金蔵論』の研究」（平成 17～19 年度科学研究費補助金基盤研究（C)、研究代表者：宮井里佳、課題番号：17520049、以下「宮井科研」）に共同研究者として参加し、中国北朝末期に釈道紀という僧侶の手によって編まれた『金蔵論』に関する研究に携わった。この『金蔵論』は『賢愚経』『百縁経』といった譬喩経典から譬喩因縁譚を抄出し、類従して集成するという、類書の形式をとる書物である。中国では散逸し、日本に一部が残存するのみと考えられていたが、荒見泰史氏の発見に端を発し（「敦煌的故事綱要本」(『姜亮夫蒋礼鴻郭在貽先生紀念文集』、上海教育出版社、2003 年)、敦煌写本のなかにその写本が数点残存することが明らかになった。宮井科研においては、日本古写本と新出の敦煌写本の調査を行い、これまで不明であった本文の一部解明を果たし、本文の注釈等の基礎的な検討を終えた。

国文学の分野において、『金蔵論』研究が資するのは、何と言っても『今昔物語集』(『今昔』）の出典研究である。『金蔵論』に関しては、すでに新日本古典文学大系『今昔物語集』１（今野達校注、岩波書店、1997 年）により、天竺部の出典の一としての評価が定まっていた。研究代表者は、新たに判明した『金蔵論』敦煌本の本文を手がかりに、『今昔』天竺部巻二所収の説話が多く『金蔵論』に依拠することを確認した（「『金蔵論』と『今昔物語集』―『金蔵論』敦煌本と『今昔物語集』巻二との関連を中心に―」、『国語国文』77-8、2008 年 8 月)。このことは『金蔵論』が『今昔』天竺部生成に関わる重要な役割を果たしていたことを示唆するものと考えられ、日本の説話文学における『金蔵論』の重要性があらためて認識されることとなった。

一方、『金蔵論』が『今昔』の出典として注目されるのと同時に、以前は有力な出典と考えられていた『法苑珠林』がその位置をあけわたすこととなった。『法苑珠林』は、中国の伝統的な類書の形式にのっとった百科事典的な書であるが、仏教的な世界観のもと、因縁譚を多く収載することから、『日本霊異記』をはじめとする説話文学研究においてもしばしば言及されるものであった。ところが、近年の寺院調査においても『法苑珠林』の古写本は数えるほどしか確認されておらず、奈良・平安時代を通じた流布状況については、実は不明瞭な点が多いことがわかってきた。

そこで、日本説話文学と仏教類書との比較研究を進めるための基礎研究として、『金蔵論』のみならず、『法苑珠林』などの類書について、中国および日本におけるその流布状況を精査することが必要であると考えるにいたった。

２．研究の目的

本研究は、日本仏教説話文学における漢訳仏典の影響を考察するための基礎研究として、中国撰述の仏教類書の調査を行い、その受容の実態を明らかにしようとするものである。具体的には、仏教類書のなかでも『今昔』に影響を与えた『金蔵論』と、中国の説話をも多く含む『法苑珠林』を二つの柱とする。

『金蔵論』に関しては、いまだ明らかになっていない巻の本文を解明することを目指すと同時に、古目録・古記録などにみられる関連記事の収集を行うことで、中国および日本におけるそれらの受容史を構築することを目指す。

『法苑珠林』については、日本においても古写本の存在がほとんど確認されていないことから、敦煌写本中に残るものが、その流布状況や受容の様相を探るための大きな手がかりとなる。そこで本研究では敦煌写本中に残存する『法苑珠林』をはじめとする仏教類書の写本を調査した上で、基礎的なデータをまとめ、受容に関する問題を抽出する。

３．研究の方法

（１）『金蔵論』の調査研究

①『金蔵論』韓国版本

宮井科研では日本古写本および敦煌写本にもとづいて研究を進めたが、その後、韓国に高麗時代の『金蔵論』版本が一部残存しており、韓国の研究者によって研究成果が公刊されていることが明らかになった（崔鈆植「『金藏論』에 대하여『불교학연구』9、2004 年 12 月)。本研究では、宮井氏との共同研究の形で、この韓国版本の詳細な分析を行う。

②逸文探索および散逸部分の復元

韓国版本の出現により、全七巻（九巻とも）いわれる『金蔵論』のうち四巻分の本文が判明したが、依然として不明な巻が残っている。それらの散逸部分に関して、逸文の探索を進

め、『金蔵論』の全体像解明を目指す。

③日本における受容
『金蔵論』の日本における受容に関しては、正倉院文書の記事が早くから指摘されていたが、文書の年紀が問題にされるだけで、個々の文書の検討はまったくなされていなかった。本研究では、近年の正倉院文書研究の成果を参照しつつ、それぞれの文書を検討し、奈良朝における『金蔵論』受容の様相をさらに具体的に明らかにする。
また、説話集との関連については、韓国版本によって判明した新出本文と『今昔』との比較検討を行う。

（２）敦煌写本中の仏教類書の調査

本研究においては、パリ国家図書館蔵スタインコレクション、および大英図書館蔵スタインコレクションに含まれる仏教類書写本の調査を行い、その結果をまとめる。

（３）研究成果の発表と国際研究交流
『金蔵論』をはじめとする仏教類書に対する関心は、国内外で高まっており、中国や台湾の研究者との研究交流も盛んに行われている。本研究では、国際研究集会などを通じて研究成果を発信しつつ、海外における最新の研究成果についての知見を共有する。

４．研究成果

（１）『金蔵論』の調査研究

①『金蔵論』韓国版本
新出の韓国版本は巻一および巻二の合冊であるが、日本古写本としてかねてより知られていた大谷大学蔵本（谷大本）もまた同様に巻一、二の合冊である。ところが、巻一がほぼ同文であるのに対して、巻二の内容は両者で全く異なるものであった。これについては、その構成や本文系統が他の残存巻とは異質であることから、谷大本の巻二に関して『金蔵論』の本文としての疑義を呈したことがあった（本井「大谷大学蔵『衆経要集金蔵論』考―巻第二の問題を中心に―」、『大谷学報』85-3、2006 年 7 月）。一方、韓国版本巻二は、構成、本文の両面で他の巻と共通した特徴を有するものであり、本来の『金蔵論』本文であることは疑問の余地がなかった。そこで、韓国版本の巻二を本来の『金蔵論』の本文と認定し、巻一は谷大本、巻二は韓国版本、巻五と六とは敦煌写本を底本と定め、『金蔵論』本文を校訂本文の形で公刊した（宮井・本井『金蔵論本文と研究』臨川書店、2011 年 2 月）。これにより『金蔵論』現存部分の本文が利用に供されることとなり、本書は第 30 回新村出賞を受賞するなど、評価を得ている。

②逸文探索および散逸部分の復元
韓国版本の出現は、新たな本文の判明という以外に、『金蔵論』復元研究においても重要な意義を有するものであった。巻頭に全巻の章目録が付されており、これによって散逸巻の内容を推測することが可能になったからである。本研究においては、この章目録の記述と、『義楚六帖』をはじめとする諸書に残る逸文、さらには『金蔵論』との同文的同話を多く含む『法苑珠林』などをも利用して、散逸巻について復元試案を作成した。
さらに、この復元試案にもとづき、『金蔵論』の構成の検討を行ったところ、『金蔵論』の章や説話は、きわめて緊密に配列されている様子が浮かび上がってきた。『金蔵論』の編者道紀が、善因善果、悪因悪果の諸相を示すことにより、在俗の人々を仏道へと導くために効果的な構成を企図していたことが読みとれる。『金蔵論』の唱導の書としての性格が浮き彫りになったといえる。これらの成果については前掲書第一部第二章に発表した。
『金蔵論』の逸文探索は本研究の重要課題のひとつであったが、成果のひとつとして、天理図書館所蔵の朝鮮版『釈氏源流』の余白に『金蔵論』からの抜書とみられる書入を確認したことが挙げられる。これは、朝鮮版『釈氏源流』が刊行される 17 世紀まで、朝鮮半島では『金蔵論』が読まれていたことを示す貴重な資料であり、『金蔵論』が刊本一切経の刊行後は顧みられなくなったという従来の見解について、新たな視点からの再検討を迫るものである。これについては第 2 回東アジア宗教文献国際研究集会において「東アジアにおける『金蔵論』―朝鮮半島の新出資料を例に―」と題して口頭発表を行った。
さらに、韓国の研究者によりあらたな『金蔵論』韓国版本が発見されたとの報ももたらされている。いまだ閲覧の機会を得ていないが、将来的にその全貌が明らかになれば、『金蔵論』研究がさらに進展することは間違いない。特に、先の『釈氏源流』の例ともあわせて、朝鮮半島における『金蔵論』の受容の問題を考える上で重要である。今後は日本だけでなく、広く東アジアを視野に入れた上での研究へと展開させる必要があろう。

③日本における受容
正倉院文書のなかには『金蔵論』と目される書名が散見する。本研究では、近年の正倉院文書の研究成果に導かれながら関係文書を検討することにより、『金蔵論』が光明皇后発願の五月一日経をはじめ、藤原北夫人発願一切経、景雲経（称徳天皇の勅旨一切経）、図書寮経などに含まれていたことを明らか

にした。しかも、五月一日経においては、『開元録』に入蔵している『経律異相』や『諸経要集』に先だって『金蔵論』が書写されているなど、その流布状況の一端が明らかになった。

また、説話集との関連については、韓国版本によって判明した新出本文と『今昔』との比較検討を行った。その結果、従来から指摘されていた以上に『金蔵論』を出典とする説話が多いことが判明した。現存話に加えて、復元試案に含まれる話をも勘案すると、『今昔』天竺部巻二については、半数以上が『金蔵論』にもとづくと推測できる。『金蔵論』が『今昔』天竺部において、主たる依拠資料であったことが浮かび上がってきた。

（２）敦煌写本中の仏教類書の調査

平成 22 年度はパリ国家図書館蔵スタインコレクションの、平成 23 年度は大英図書館蔵スタインコレクションの調査を行い、管見に入った敦煌写本中の『法苑珠林』等の仏教類書写本の熟覧を行い、その調査結果にもとづいて書誌データや引用箇所を一覧した基礎資料を作成した。これらの写本のなかには、規範意識にもとづいて書写されたものはほとんどなく、大部分が簡約本や抄出本であることが判明した。抄出本のなかには、『法苑珠林』などの記事を再構成して引用するものもあり、敦煌における説話利用の実際を反映するものとして注目される。

（３）研究成果の発表と国際研究交流

本研究プロジェクトの一環として、敦煌の唱導資料を精力的に調査研究する荒見泰史氏、入宋僧と典籍の伝来に関心を有する近本謙介氏との共催により、東アジア宗教文献国際研究集会を開催した。第１回は台湾国立政治大学の楊明璋氏をはじめ、仏教学、日本文学、中国文学の研究者をパネリストとして招き、研究交流を行った（2011 年 3 月 9 日・10 日、於筑波大学）。敦煌と日本とに残る宗教文献にはさまざまな点で共通する部分が多いことが認識されるとともに、国内外の研究成果が共有されにくい現状から、内外の研究者間で問題意識に差異があることも浮き彫りになり、緊密な連携研究の必要性が急務とされた。この問題意識を発展させる形で、第２回は敦煌学の第一人者である南華大学の鄭阿財氏を筆頭に、台湾、中国、韓国からも研究者を招き、「唱導、講経と文学」のテーマのもと、シンポジウムを開催した（2012 年 3 月 17 日～19 日、於広島大学）。研究代表者は両会においてそれぞれ本研究課題の成果を発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①本井牧子「敦煌写本中の『法苑珠林』と『諸経要集』」、『敦煌寫本研究年報』6、2012 年 3 月、81～98 頁、査読無

②本井牧子「『金蔵論』と日本説話文学」、［日本語版］금강대학교 불교문화연구소（金剛大学校仏教文化研究所）編『불교학리뷰（Critical Review for Buddhist Studies／仏教学レビュー)』第 7 号、85～100 頁、2010 年 6 月・
［韓国語版］금강대학교 불교문화연구소（金剛大学校仏教文化研究所）編『고대 동아시아 불교 문헌의 새로운 발견（古代東アジア仏教文献の新たな発見)』、317～331 頁、2010 年 8 月、査読無

〔学会発表〕（計３件）

①本井牧子「東アジアにおける『金蔵論』―朝鮮半島の新出資料を例に―」、第 2 回東アジア宗教文献国際研究集会、2012 年 3 月 19 日、於広島大学

②本井牧子「『金蔵論』とその構成」、第１回東アジア宗教文献国際研究集会、2011 年 3 月 10 日、於筑波大学

③本井牧子「『金蔵論』韓国版本と『今昔物語集』」平成 22 年度説話文学会大会、2010 年 6 月 27 日、於広島大学

〔図書〕（計１件）

①宮井里佳・本井牧子『金蔵論本文と研究』、臨川書店、2011 年 2 月、総ページ数 848 頁、第一部第二章「『金蔵論』全体像復元の試み」594～712 頁・第三部「日本における『金蔵論』の受容」760～822 頁（本井執筆）

６．研究組織

(1)研究代表者

本井　牧子（MOTOI MAKIKO）
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：00410978